

あびこの文化

発行人
村上智雅子
我孫子市
若松122-6
04(7184)
1804

放談くらぶ参加報告

『稲村雑談』志賀直哉と小熊太郎吉』

芦崎 敬己

節分が過ぎ、良い天気恵まれた二月二一日(土)に我孫子の文化を守る会の「放談くらぶ」がアビスタ第2学習室で開催された。

今回のテーマは、「志賀直哉と小熊太郎吉」である。小熊太郎吉と聞いても、どのような人物か良くは知らない方が多いことと思う。その人物が志賀直哉とどのような関係があり、今日の「放談くらぶ」のテーマに繋がっていくのか、分からないだけに興味津々である。

講師は、我孫子市教育委員会に勤める白樺文学館の主任学芸員の稲村隆氏である。タイトルに「稲村雑談」とあるが、講師の稲村氏が雑談するのではなく、ご存知の方が多いと思うが、志賀直哉が鎌倉稲村ヶ



崎で暮らしていた頃に書いた随筆(エッセイ)の作品名である。それに因んで自らの名と同じために「稲村雑談」と洒落っぽくタイトルに使っているというのである。稲村氏は、どこか口調が噺家のようにであり、絶妙な語り口だ。

小熊太郎吉は、志賀直哉が書いた小説『暗夜行路』の草稿を譲り受けた人物であるという。

何故に今頃発見され、小熊太郎吉が持っていたのか、発見したのは誰か、そもそも草稿は本物なのかと次々に疑問が湧いてくる。

「小熊」と聞くと、我孫子宿脇本陣の茅葺屋根の建物が現存し居住している家と同じ、地元の名士と言われる。

稲村氏は、この辺の疑問を参加者にどのように解き明かしてくれるのだろうかと期待が膨らんだ。

この『暗夜行路』草稿の発見は、白樺文学館の発表で二〇二五(令和七)年五月二八日の朝日新聞や読売新聞、日経新聞に掲載され、身近に知ることができた。

発表した白樺文学館のホームページを要約すると、我孫子市内の個人宅から、志賀直哉の小説『暗夜行路』の草稿(小説の下書き)が新たに発見された。

草稿は小熊太郎吉氏の曾孫にあたる小熊吉明さん宅より発見され、志賀直哉研究の専門家である 生井知子教授(同志社女子大学)に鑑定を依頼したところ、志賀直哉の真筆ノートであると確認された。

一方、五月二八日の読売新聞(夕刊)では、

「『暗夜行路』の草稿発見」との大見出しに、更に「全集に未収録 推敲の跡」の見出しを繋げて、草稿が市販のノートに鉛筆で書かれ、何度も推敲した様子、小説での主人公の名「時任謙作」が「順吉」となっている特徴を報じていた。更に、草稿はノート(縦20センチ、横14.5センチ)

に49ページに渡り記され、草稿を人に譲るのは異例で、小熊との深い交流が伺えるなどと報じていた。

一 稲村雑談の構成と流れ

稲村氏は、今日の講演にあたり講演全体を三つの構成で説明し、講演全体を俯瞰できるようにした。

第一は、志賀直哉の概説として、経歴、生い立ち、我孫子移住の経緯、家系である。第二は、『暗夜行路』草稿発見の三つの意義、その前提として『暗夜行路』のストーリーと執筆別構成、掲載誌『改造』での構成、草稿発見の学術的価値。第三は、小熊太郎吉の評価である。生れ、生業、生活の糧を追いつつ、どんな人物だったのかを深掘りしていく構成だ。

当日は、講演の構成に従い、講師作成のA4判レジメ八頁(体裁は、A3用紙に印刷)と、小熊太郎吉の「町治上に於ける教育向上意見」及び「設備の完全を分けて(五項目)」(同二頁)を掲載した史料と、『暗夜行路』に関わる志賀直哉の年表が配られた。

二 志賀直哉の概説

志賀直哉は、一八八三(明治一六)年二月二〇日、宮城県石巻町に父・志賀直温なほほると母・銀の二男として生まれ、祖父・直道は相馬中村藩(現在の福島県浜通り北部)の家令(貴族・華族の家の執事長の役職)であったが、明治時代になり明治政府からの一時金で足尾銅山に投資して実業家として生活していたという。

志賀直哉は、文化勲章を受章し、「小説の神様」との異名を持ち、『白樺』の代表的作家と呼ばれた。

一九一四(大正三)年一二月に勘解由小路康子と結婚し、父との不和が悪化し、創作活動が停止した。

柳宗悦の誘いで、一九一五(大正四)年九月に我孫子に移住し、八年間暮らした。その間に『和解』を著した。

我孫子は、唯一の長編である『暗夜行路』の連載が始まった場所ということで、創作の街と位置付けている。

三 『暗夜行路』草稿発見の三つの意義

今回、『暗夜行路』の草稿が発見されたことの価値や意義は、一つに、学術的価値として日本近代文学史において最高峰とされる作品の創作段階資料の新発見であること。二つには、小熊太郎吉のところから見つかり、地域の人々との交流を示す資料として郷土的価値があること。三つには、『暗夜行路』の草稿が「物語の生まれるまちあび」このキャッチフレーズの象徴的資料として広報的価値があると位置付けた。

四 小熊太郎吉の評価

(1) 我孫子の粋人―郷土的価値

配付されたレジュメを元に小熊太郎吉の経歴を見る。

小熊太郎吉は、一八七四(明治七)年六月一日、岡発戸村(現在我孫子市岡発戸)の渡辺太郎左門家に、運藏、ゆりの長男として誕生した。小学校教員を経て、提灯、剥製、昆虫標本作業などをして生計を立てる。

新聞報道では「和製ファープル」と称され、歴史、科学、文芸、博物収集など、多方面にわたる興味関心を持ち、記録・保存した人物。近代我孫子を代表する「知識人・教養人」といべき人物、だと紹介している。

(2) 小熊太郎吉年表

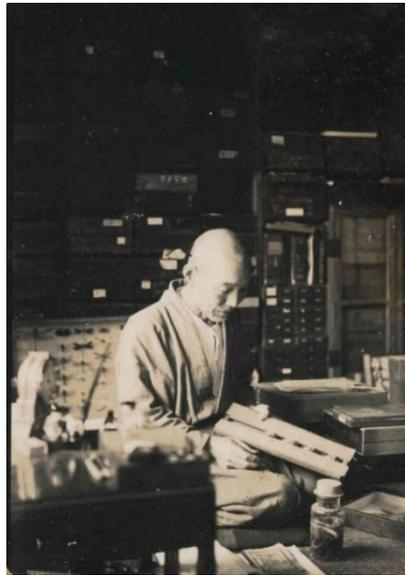
ここで小熊太郎吉の年表をレジュメから引用する。
一八七四(明治一九)年生まれだが、この年は、第一次伊藤博文内閣の時代である。「学校令」が公布

され、教育制度が刷新された。更に、戸籍法細則(明治一九年式戸籍)が制定され、近代化の基礎を築き出した時代といえる。

・一八八六(明治一九)年：岡発戸小学校(現我孫子第一小学校)中退。【一二歳】

・一八九四(明治二七)年：柏尋常小学校(現柏第一小学校)雇教員。【二〇歳】

・一八九六(明治二九)年：千葉県尋常師範学校現千葉大学教育学部講習科修業、尋常科准教員免許取得。【二三歳】



小熊太郎吉(白樺文学館蔵)

・一八九七(明治三〇)年：市川尋常小学校(現市川市市川小学校)赴任。【二三歳】

・一八九八(明治三一)年：この頃我孫子高等小学校(現我孫子第一小学校)に赴任、尋常科本科正教員免許取得。小熊家に婿入り。【二四歳】

・一八九九(明治三二)年：塚田尋常小学校(現柏第一小学校)訓導として赴任。【二五歳】

・一九〇一(明治三四)年：同校長兼任。【二七歳】

・一九〇二(明治三五)年：古ヶ崎尋常高等小学校(現松戸市北部小学校)訓導兼校長として赴任、郡視学と論争になり、退職。【二八歳】

・一九〇三(明治三六)年：提灯屋を開業、剥製、昆虫標本なども製作。【二九歳】

・一九一四(大正五)年：柳宗悦、志賀直哉たち白樺派と交流が始まる。この頃「回覧倶楽部」など毎月のように雑誌を編集、制作する。【四〇歳】

・一九二一(大正一〇)年：我孫子町会議員当選。「町治上に於ける教育向上意見」を書く。【四七歳】

・一九二三(大正一二)年：この頃志賀直哉より『暗夜行路』草稿を託されたか。【四九歳】

・一九二四(大正一三年)：我孫子町会議員を任期途中で辞職。【五〇歳】

・一九四〇(昭和一五年)：布佐地域で「セミタケ」(キノコ)の一種を発見する。【六六歳】

・一九四二(昭和一七年)：我孫子地域で「オニフスベ」(キノコ)の一種を発見する。【六八歳】

・一九四三(昭和四三年)：死去【六九歳】

(3) 人物像 (「是登」・「是翁」と称していた。)

独学で教員検定試験に合格後、柏、市川の他、我孫子町高等小学校(現我孫子市立第一小学校)に赴任、同校在職中の一八九八(明治三一)年に結婚し、婿養子となり渡辺から小熊姓に変わる。その後船橋、松戸にて校長を務めたが、明治三五(一九〇二)年、郡視学(地方教育行政の監督官)と教育上の問題で論争となり、信念を通すため退職した。

翌年より提灯屋を営んだ。そのため号(こう)を提灯の下げるの漢字の右側のつくり「是」と、「灯」の旧字体の「燈」の字の作りを用いて「是登」を雅号にした様である。更に剥製や昆虫標本の制作を稼業とした。剥製制作の修行は二年に及んだとのこと。大正三(一九一四)年～大正一二(一九二三)年の間で、柳宗悦、志賀直哉らと交流し、元来関心のあったと文学、文芸活動も行っている。この頃に「暗夜行路」の草稿ノートを託されたと推測している。

私見だが、明治中期以降に牧野富太郎、南方熊楠、柳田国男らが輩出され、従来の『本草学』から

『博物学』と発展し、その後の民俗学へと繋がってゆく途中で、小熊太郎吉の存在も大きかったと思う。小熊太郎吉は、後に剥製制作の技術を独学で確立するが、その間の防腐・悪臭に関わる苦労等は、冷凍技術の無い時代に家族にとっても相当なものだった。小熊太郎吉は、その後、北海道に渡り冬眠中のヒゲマを数日間観察するなど、まさに「狂氣的な執着心」でリアルな剥製制作に没頭した。シカゴ万博(一八九三年)にエゾシカの剥製を出品し、その精巧さで高い芸術性が評価されたとのことだった。

(4) 採集・分類・記録

剥製制作の修行は二年に及んだという。展示物にカニの標本があるが、一番多いのは昆虫の標本。一〇万匹以上があるという。

自然科学への関心が顕著であり、新聞報道では「街の昆虫学者」や「和製ファーブル」などと称された。

一九四一(昭和一六)年六月二五日の東京日日新聞に「街の昆虫学者 標本箱に埋まる小熊翁」と題し、「市井の一老人が約四十年間自然科学の研究に没頭し、学会に幾多の動植物の生態研究を発表してゐる、この隠れた学者は東葛飾郡我孫子町の小熊太郎吉翁(六八)で、主として昆虫の研究に力を注いでゐるが、これまでに採集した昆虫数十万匹、現在所有する珍しい昆虫は十万以上で、一室内に類別した昆虫箱が天井の高さまでギッシリと積み上げられ偉観を呈してゐる」と紹介された。実際、発見の連絡を受けて稲村氏が現場に行くと正に、新聞記事の通り天井まで整理箱が高く積み上がった。

(5) 議員としての活動

一九二二(大正一〇)年三月我孫子町町会議員に当選し、一九二四(大正一三)年二月に辞職するまで務めた。

小熊太郎吉は、議員当選の翌々日に「町治定に於ける教育向上意見」とする意見書をまとめ上げた。「町村の発達は、人物の輩出にあり、人物の輩出は教育の事業にあり」と謳っている。この言葉に対して、稲村講師は、地域に対する住民の誇りや愛着、地域をより良くしようという意識、即ち「シビックプライド」を学ぶことができる、郷土



我孫子の文化的土台形成に尽力した人物と締め括った。

質問タイムで、講師が説明した、常磐線の機関車の給水タンクに関して、当時を思い返して参考意見をする参加者。当会の村越邦雄会員さん。

子供の頃に、タンクの周りで遊んだ記憶があったという。

あびこだより 122号
放談くらぶ

「稲村雑談」——原田京平——

白樺文学館 主任学芸員 稲村隆氏

画家・歌人である原田京平(一八九五—一九三六)は、現在の静岡県浜松市出身。

一九二二(大正一〇)年から我孫子に移住し志賀直哉と交流し、志賀が我孫子を去った一九三二(大正二二)年から一九二八(昭和三)年まで志賀直哉邸に居住。「恭平」「聚文」「和周」などの号を使用しました。



ハケの道と手賀沼(白樺文学館蔵)

「絵画を山本鼎に師事し、日本美術院春陽会に所属しました。短歌では、窪田空穂と交流し、ほとんど雑誌等には発表しませんでした。遺歌集「雲の流れ」には、我孫子を詠んだ短歌も含まれています。

また残された資料には焼き物や民族楽器なども含まれ、民俗学、民藝への興味関心もみられます。

近年では出身地である浜松市での展覧会や浜松市美術館に収蔵されるなど少しずつ評価が高まっている人物です。

原田京平研究の第一人者である平林清江氏による連載記事が続いています。改めて原田京平を顕彰する意義についてコレクションを紹介しながらお話できればと思います。

放談くらぶ開催概要

日時 四月二十五日(土)午後二時〜四時

場所 II アビスタ 第2学習室

所在地 II 我孫子市若松二六―四(市民図書館二階)

現在、白樺文学館において、「コレクション展」没後90年原田京平コレクション」が開催されています。

入館料:300円(高校・大学生200円)

問合せ:白樺文学館04(7185)2192

所在地:我孫子市緑二丁目十一番八号

会期:三月五日から六月七日迄(月曜・休)



〔寄稿〕 中里薬師堂扁額の修復について

中里諏訪神社 責任役員 藤根 勉 氏

令和八年二月一日、年に一度の中里薬師堂のご開帳が行われました。堂内には薬師如来と脇侍として日光菩薩、月光菩薩そして薬師如来の十二の大願を表す十二神将像が祀られており、平成一八年に我孫子市の指定文化財として指定され、(目眼)の守り仏として崇められているものです。

令和二年に五年の歳月と市からの多額の助成金と地元自治会はじめ近在崇敬者の浄財をもってそれぞれの尊像が修復されたところですが、あろうことか文化財指定外ながら堂の看板ともいえる扁額の劣化が著しく、施された塗色も本来の色はもとより、白色の下地もまもなくはげ落ちてしまうであろうと云う有様で、非常に憂いていたものでした。

そこで薬師如来他の尊像の修復をお願いした茨城県真壁町の古物修復工房に相談したところ、「これ

以上風化が進めば近いうちに白色の最後の塗色もはげ落ちただの文字を刻んだ樺の板切れになつてしまうでしょう」とのことでした。

堂内の尊像がきれいに修復されても扁額がみすぼらしいのでは心苦しいの思いから、区(自治会)の財政の

中里薬師堂 (藤根氏提供)



瑠璃色に修復された扁額 (藤根氏提供)



厳しいことを慮つて一肌脱ごうと区の許可を得て昨年一月早速修復を依頼しました。

一肌脱ぐとは非常にかつこいものですがこれには後日談があり、当方年金生活でもあることからあ

まり脱ぎすぎると懐が風邪をひいてしまいやしないかと如来修復時に奉賛会で一緒に活動した中野与兵衛さんに話したところ、快く「俺も少し脱ぐよ」と言われ二人で修復のお手伝いをさせていただいた次第です。

二月一日のご開帳までに間に合うように」とご無理願ったものの今年の一月一〇日には完成。修復叶った扁額はまばゆいばかりの瑠璃色に塗色され、薬師様の正式名称「薬師瑠璃光如来」の名前に初めて合点がいったものでした。

扁額の文字は篆書体で、篆刻という手法で樺の板に刻まれており、馴染みのない書体でもあり、参拝客も扁額の文字が「瑠璃光堂」と読めた方は少なかつたのではないでしょう。いずれにしろ数年来の憂いが晴れ、無事披露できたことは大変有難いことでした。

ご開帳供養会当日は、雨にも拘わらず主催者が設けた奉納披露棚の掲出枠が僅かとなる位多くの方々が参拝に訪れ、ご本尊を具に拝み手を合わせて

おりました。また扁額の瑠璃色の美しさ、鮮やかさに感嘆の声も上がる中、「うちの不動様の扁額も直したい」と式典に招待した隣接区長から問い合わせを受ける程でした。

私は神社の総代やお寺の役員等もしておりますが、六月には齢七四を迎えるに至り、それらのかかわりの中で醸成されてきた神仏への思いが自分の中に少しずつ蓄積されつつあるのではと感ずるところです。江戸時代後期一八〇〇年台の制作といわれるこれらの尊像を数百年に渡る栄枯盛衰の波を乗り越え、今に伝えて下さった先人の並々ならぬご尽力に「報恩感謝」の思いを強くしたところです。

この度修復なった扁額は、年に一度ではなく何時でも見る事ができます。今なお見るものに訴えてくる樺の古木に刻み込まれた「瑠璃光堂」の文字の力強さや鮮やかな瑠璃色の彩色を是非、具にご覧いただきたくご紹介しました。

中里薬師堂薬師三尊及び十二神像

場所：我孫子市中里 二二三八

解説：薬師三尊は本尊の薬師如来と脇侍の日光菩薩・月光菩薩のことをいい、人びとを病氣から救うとされます。また 十二神将は十二支と結びついて薬師如来を信じる人びとを加護するとされます。中里薬師堂の薬師三尊および十二神将像の制作年代は、江戸時代後期と考えられます。

中里薬師堂のように本尊と脇侍、十二神将がすべて揃って残されていることは大変珍しく、地域の人びとによる篤い信仰と管理がなされてきたことを示します。現在、本尊は秘仏とされ、年に一度二月一日の御開帳に公開されています。

(平成一八年市指定)

【あびこ電脳考古博物館より】



「連載17回」

《世田谷の頃原田京平ファミリーを知る・

その8の1 加藤義男氏が描いた「間取り図」

から聚文画室を語る―「雲の流れ」の

表紙絵に描かれたのは何か?》

附 原田京平略年譜

画家歌人 原田京平とそのファミリーの旧宅跡地

現 加藤様 邸ⅡKフラットⅡ東京都世田谷区桜丘

四一九―三三六) 探訪・取材の記

平林 清江(会員)

「睦・麻那母子が、その後、杉並と笠間芸術村にアトリエ・工房を建てているが、驚くほど世田谷のそれに似ている。世田谷は、ファミリーの原点でしょう。」

原田喬氏のメールから

はじめに

何故、原田京平・睦夫妻は、自身の居宅兼アトリエを「聚文画室」と名付けたのか?

「聚文画室」(しゅうぶんがしつ)は、昭和五年三月、夫妻共に画家であった原田京平・睦が、当時の住所表記である、世田谷区世田谷五丁目二八四九番地(現 世田谷区桜丘四一九―三三六Ⅱ加藤様邸ⅡKフラット)に、自ら三百坪の土地を求め、同地に居宅兼アトリエを建てて住まい、また、自ら名付けた建物の名称である。

「聚文画室」という呼称が文字資料の中で、明確に記されているのは、筆者の知るところでは、「原田睦八十八歳自選画集」(注1)の中だけで、同著所収の《原田睦年譜》の昭和五年の項に、「三月世田谷五丁目に聚文画室を建て転居」とある。

画家であり歌人でもあった、京平(和周)の遺歌集「雲の流れ」(注2)の中の《原田和周略年譜》には、ただ「昭和五年春、画室を世田ヶ谷に建て、移る」とのみあるばかりである。

昭和十一年一月に京平が病を得て逝去し、同遺歌集は妻の睦によつて、同年五月に編さん・出版されたが、画室に対して「聚文」という固有名詞を付していない。原田睦が、最晩年の八十八歳で著し、長女の麻那が出版した「原田睦 八十八歳自選画集」の《原田睦年譜》においては、「聚文画室」と明記されている。何か、ここに最晩年における睦の、自らの人生と夫京平への思いが見て取れるような記述である。それ故に、原田夫妻にとり、「聚文画室」とは何であったのか? ということについて、心して語らなければならないと思うのである。

原田京平の雅号の一つである「聚文」は、大正九年の日本美術院洋画部解散後、京平が春陽会に参加した大正十一年頃から使用された雅号である。その雅号を以て夫妻は、「聚文画室」と名付けたと思われる。原田京平は、実名の京平の他に三つの雅号を持っている。日本美術院洋画部研究生となった大正三年からは「恭平」(きょうへい)を、「和周」(わしゅう)は京平の晩年の雅号で、昭和八年頃から使用された。前述した昭和十一年発行の遺歌集「雲の流れ」の著者名には「和周」が用いられている。その中でも、夫妻にとつて「聚文」という雅号には、特別の思いが込められていたようである。それは何故であろうか?

「聚文」は、画家としての上昇期に名付けられ使用された雅号

原田京平の画家としての歴史をたどってみると、大正十二年(二十八歳)春陽会第一回展覧会に《秋の日》を出品し、以後毎年入選を果たしている。その一連の実績が認められ、より華々しいステップへ進む

ことが出来たのだと考えられる。この頃に「聚文」を用い始めているが、その「華々しいステップ」とはどのようなものであったのだろうか?

大正十五年五月と昭和五年二月に「聖徳太子奉讃美術展覧会」という美術展覧会が開催されている。この美術展覧会の主催者は、「財団法人聖徳太子奉讃会」という団体であった。展覧会の構成は、第一部(日本画 西洋画)、第二部(彫刻)、第三部(工芸)となっており、当時我が国唯一の、近代的総合美術展覧会という意義を有する美術展覧会であった。

大正十五年開催の「第一回聖徳太子奉讃美術展覧会」において、原田京平は、同奉讃会総裁の台命(皇族からの命令)により、第一部(西洋画)の部において委員に任せられ、作品を二点無鑑査で出品している。

同展覧会の会場は、大正十五年五月に新建なつたばかりの東京府美術館(我が国最初の近代的美術館・現 東京都美術館)で、後援は東京府であった。第一回展覧会では、図録が作製されており、出品作品の写真版が掲載されている。この折りの京平の出品者名は「聚文」である。

さらに、昭和五年三月開催の「第二回聖徳太子奉讃美術展覧会」にも、京平は作品一点(《川そひの村》)を出品している。「第二回展」は、故総裁久邇元帥宮殿下の一周忌にあたり、「開催趣意書」によれば、奉悼の意を表した開催とのことで、この度の総裁は久邇宮朝融王殿下であった。これら一連のことは、画家として大変な名誉に与つたことのようにあり、その際用いた雅号が、やはり「聚文」であった。

原田夫妻が昭和三年三月、我孫子町から上京し、最初「世田谷若林」に住んだが、この際、上京を強く促したのは、この「第一回聖徳太子奉讃美術展覧会」に作品を出品したことが、その大きな要因と思われ

る。画家としての人生の大きなステップアップとなったのである。

「第一回聖徳太子奉讃美術展覧会」の委員に任せられ、二点の作品出品、上京、さらに「第二回展」にも作品を寄せた。また、世田谷に自ら土地を求め、「聚文画室」建築という一連の人生イベントは、画家夫妻にとり、華々しい人生の成功の証となった、と言つて良いであろう。

この間の詳細は、本シリーズ⑤その4 原田夫妻が「世田谷若林」に転居した背景を考察する」と同⑤その5 原田京平も出品した「聖徳太子奉讃美術展覧会」にかかわる資料解説⑤の中で解説しているので、ご覧頂ければ幸いである。

一、そして、このたび、「聚文画室」のたたずまいが明らかになったー加藤義男氏が、子供の頃の記憶をたどり描いた間取り図

令和四(二〇二二)年五月十七日、加藤充子氏が筆者あてに十二番目のお手紙をお届けくださった。その中の一部分を引用させて頂く。

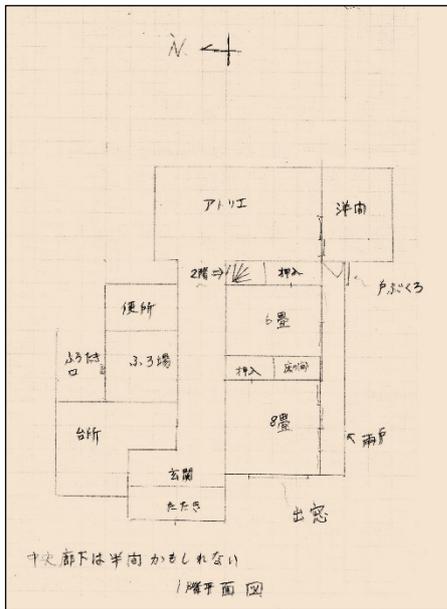
「(一)旧世田谷区世田谷五の二八四九、原田京平様の御一家がお住いでいらした地に、その家屋を受け継ぎ、又、新たに建て直した二階作りの木造住宅、そして今三代目となる共同住宅Kフラットで日々をあわたしく過ごす私です。」

このお手紙から、もしや充子氏は「聚文画室」のご記憶がお有りなのではないか?と気づき、早速「間取り図」の作製を依頼したところ、同年八月五日附け十三番目のお手紙と共に、二枚の「間取り図」が送られて来たのである。

「いつも原田様御一族、又、旧世田谷区世田谷五の二八四九番地の土地をお心にかけて下さりありがとうございます。どうぞございます。」

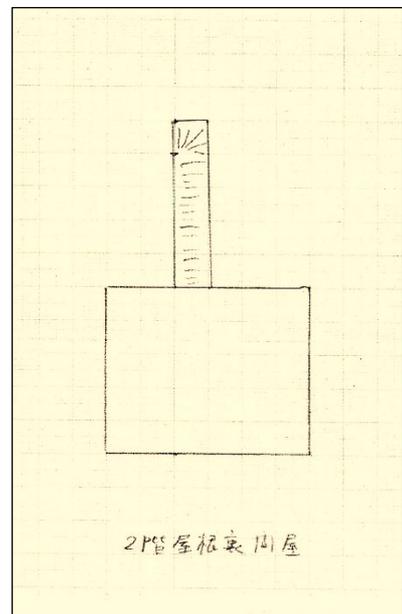
私もこのオーラのある地を出来るだけ思いをこめて維持していこうと努力して居ります。」

実際、小学生の頃から、ここに住まわれたという、加藤義男氏(充子氏の御主人様)が、ご記憶を辿って描いてくださったのが、ここに紹介した「間取り図」である。



「聚文画室」の間取り図

「聚文画室」の間取り図は、筆者の想像を超えて、かなり広いものであった。アトリエは独立棟ではなく、居宅一階にあり東側の洋間とつながっている。二階に屋根裏部屋があり、内階段で上り下りしたようである。加藤義男氏は、子供の頃からこの家に住まわれ、アトリエで勉強をされたとのことである。こうして、貴重な間取り図をつくづく眺めていると、原田ファミリーの人々の日常生活が想像され、ファミリーの人々がより親しく身近に感じられてくるから不思議である。



「聚文画室」二階の屋根裏部屋

「睦・麻那母子が、その後、杉並と笠間芸術村にアトリエ・工房を建てているが、驚くほど世田谷のそれに似ている。世田谷はファミリーの原点でしょう。」

九十年以上も前に建てられた「聚文画室」の鮮明な間取り図を描いて下さった加藤義男氏には、心からの感謝を申し上げます。

*文中の傍線は筆者による

二、「聚文画室」は夫妻の楽園であり安住の家

本シリーズの⑤その2で取り上げたように、旧世田谷区世田谷二八四九番地の土地と、その土地に原田夫妻が好んで自ら植えた、木々や花々に囲まれて立つ「聚文画室」は二人が構築した「楽園」であった。

武蔵野台地に位置する世田谷区桜丘は「下界と宇宙の狭間」のような場所で、「武蔵野台地に吹く風と広い空は格段に魅力がある」のである。原田和周(京平)の遺歌集が「雲の流れ」と名付けられた理由が実感、体感できる場所である。

山に生れて山を好んだ彼(注 和周)は、近年殆ど風景画を描いてゐたので、一年に二、三度は一〜二月の旅に出てゐた。旅から帰ると、「もうしばらくは家にじつとしてゐたい」としみじみ云ふのであったが、静かな昼食のあとなど、此処世田ヶ谷の青い空に白い雲が悠々と流れてゐるのをみて、「あんな雲をみると、一寸旅に出てみたいな」などいふので、「旅に出ては家を思ひ、家にゐては旅を思ふと誰か書いていらした」と、私は笑ふのであったが、今ふとさうした会話が浮んで来たところから、この歌集を「雲の流れ」とつけたのである。

昭和十一年四月『雲の流れ』所収
原田睦子による、あとがき より

原田京平・睦夫妻が揃つて最後に住んだ、世田ヶ谷五丁目二八四九番地は、「武蔵野台地に吹く風と広い空には格段の魅力がある」場所である。現在のオーナー加藤様邸の取材当日、筆者も大いに感じたものであったが、ドライでやさしい風の心地よさ、そして、空が広くて近いという感覚は今でも思い返すことができる。「下界と宇宙の狭間」、何故歌集を「雲の流れ」と名付けたのか？ 筆者は、この環境にヒントがあるように感じられるのである。

三、遺歌集『雲の流れ』の表紙に描かれた場所はどこ(あるいは何)? — 二人の建築家の意見から

では、最後に歌集『雲の流れ』の表紙に描かれた場所はどこ? あるいは何? と言うことを話題にしたい。この歌集の装幀は、京平の友人で画家の碓伊之助(はざま いのすけ)(注3)の手になるものである。遺歌集「雲の流れ」の表紙に「はざま」とサインが挿入されていること、また、シンプルな箱の背には「装幀 碓伊之助」と明記されていることから理解される。

では、碓が、表紙絵に何を描いたのかを探る手がかりを求めて、同歌集の中の前田睦による(あとがき)を見てみることにする。悲痛な文章なので、少々つらいものがあるが名文なのでご覧いただきたい。

あとがき

和周逝いて二ヶ月余、私の追憶は余りに生々しくいたましい。

貧しい庭にも何時か、寂しい春がめぐってきて、かつて彼が、写生の旅から帰ると先ず庭に出て、「大きくなつたな」といつて植えかへたり伐つたりした樹々が、美しい花を咲かせてゐる、椿も、蘇芳も、うす色の木瓜も。

かつて彼は、作画の余技である自分の短歌を集めて、親しい方々にお贈りしたいと希つてゐたが、製作と生活のために旅行がちな、あわたましい日常は、つひにさうした余裕を、もちあはせなかつた。

私は今、彼の寂しくも恵まれなかつた四十二年の足跡、そして何時も人生の苦しみとたゞかひながらも、常に自然の中にあつて、芸を求めるところの彼の彩管に残されなかつた半面を語るころの短歌を読みかへす時、画業の余技として捨てるにしのびないものがある様に思はれる。

歌はかつて、『白檮(檜の異字体)』や『真木』に載せたが、近年は二三の雑誌からすゝめて頂いたが発表せず、窪田先生に折々教を乞ふだけで、今度歌のノートを整理して、私も殆ど始めてみるものが多いのであった。力のない私は、彼が十余年敬慕の心もて師事し、私が画学生時代から教を受け、或時は私共の生活の指針ともなつて下さつた恩師窪田空穂先生の多大の御盡力を頂き、こゝに彼の意志を継ぎ、遺作の集を作る事にした。

中略

巻初、序を賜はつた山本鼎先生又華麗な装幀をお描き下さつた碓伊之助先生、猶ほ、木村莊八、石山太伯、鬼塚金華、福士幸次郎の諸先生は、彼の生前敬愛の心もて師事し或ひは交友した忘れ得ぬ方々。両先生の序は、装幀並びに諸先生の御文章と共にこの歌集の美しさを、どれ程深めて下さつたか。和周の魂とともに厚く感謝の意を捧げる。

昭和十一年四月 原田睦子

※『白檮』は、原田和周が加盟していた短歌結社の名称(固有名詞) 筆者メモ



遺歌集「雲の流れ」の表紙絵

(以下、次号 その8の2に続く)

第五七回「短歌の会」作者最終採択の二首

一月二七日開催

ふるさとには桃の香りに春満ちて
ほほえむ妻と風を待ちたり

佐々木 侑

窓外(そうがい)は木枯らしなれど壁際に
桜グズを揃え春待つ

カーテンを開けると夜来の薄雪や
正月三日心新たむ

村上 智雅子

いつまでも好奇心をば持ち続け
生きる気力を維持していこう

広い庭持て余してたあの頃は
半畳の庭 愛おしきかな

前原 安世

青空に浮かぶ白雲に朝日あたり
今日はいいことあると思える

年神様が我が家を素通りせぬように
門松立てる願いをこめて

納見 美恵子

テーブルを離れて遊ぶ孫達の
見飽きたテレビ元旦の午後

谷間の池の向こうの結縁寺たにあい
曼珠沙華枯れ萌葱葉光り

芦崎 敬己

当会の行事予定

プロジェクト「短歌の会」

第五八回短歌の会 けやきプラザ10階小会議室

日時 三月二四日(火)一三時三〇分

第五九回短歌の会 けやきプラザ10階小会議室

日時 五月二六日(火)一三時三〇分

◎短歌を初めて学ぶ方、一緒に仲間になって、
短歌を楽しみませんか。

問合せ ☎(090)5333-2855(村上)

「放談くらぶ」(概要は三頁を参照)

日時 四月二五日(土)一四時〜一六時

場所 アビスタ(第二学習室)

演題 「稲村雑談―原田京平」

講師・白樺文学館主任学芸員 稲村隆氏

参加費 300円

問合せ ☎(090)5333-2855(村上)

「文化講演会」(概要は次号会報で)

日時 5月31日(日)一四時〜一六時

場所 アビスタホール

演題 「未定」

講師 元帝京大学名誉教授・荏原 畠山美術館

館長 岡部 昌幸氏

参加費 300円

「令和八年度総会」(詳細は次号会報)

日時 5月31日(日)一六時

場所 アビスタ ホール



ねのかみだいこくてんえんじゅいん
子之神大黒天延寿院で節分会(豆まき)



二月三日(火)市
内寿二丁目の子之
神大黒天延寿院境
内で厄除け護摩祈
禱・豆まきが開ら
れました。

境内には受け手
に市民一〇〇人程
が集まりました。

住職や市
長も入り数
人の年男・年
女により豆
がまかれまし

た。来年の開催を危ぶむ声が聞こえ、地元
の伝承・文化の衰退が気に掛かりました。

編集後記 ▼二月と四月の放談くらぶで

は、白樺文学館の稲村主任学芸員の協力を
得て小熊太郎吉、原田京平を続けて取り上
げ、我孫子の魅力を再発見する機会となつ
た。▼東日本大震災から十五年を迎える
にあたり、防災リユックを見直し、あの日の
教訓を改めて胸に刻んだ。▼二月二八日

の米国によるイラン攻撃でハメネイ師が殺害
された報は、国際法と国際協調の根幹を揺
るがす重大事であり、一国の主権や人命を
軽視する姿勢に強い疑問を抱く。▼遠い
国の出来事に見えても、世界の不安定さは
物価やエネルギーなど私たちの暮らしに影

を落とす。地域の文化を大切に
する一市民として、平和と法の
秩序を求める声を上げ続ける
重さを感じている。(あしたか)

